

ラジオ放送
〈平成28年4月～6月放送分〉

ON AIR



金光教の声

No.415

もくじ ~ contents

<こころの散歩道>

☞ 軽い音楽に乗せたちょっといい話

- 第1回 「大好き」と「ありがとう」で幸せになる *page 1*
- 第2回 「しか」なんて要らない *page 5*
- 第3回 ずっと大切にしたいこと *page 9*
- 第4回 ラスト一周の記憶 *page 13*

<あなたへの手紙>

☞ 悩みや疑問にお答えするQ&A

- 第1回 イライラ／がんの不安 *page 17*
- 第2回 膝の痛み／子どものしつけ *page 21*
- 第3回 父の暴言／金光教のボランティア活動 *page 25*
- 第4回 参拝すると得か／夜泣き *page 29*

<先生のおはなし>

☞ 金光教の先生のお話です。

- 祖父を辿り
兵庫県・志筑教会 地田治美 *page 33*

<信心ライブ>

☞ 金光教の集会で行われた発表や講話などを紹介します。

- 第1回 ピンチなんて関係ない *page 37*
- 第2回 おっばいの力 *page 41*
- 第3回 トマトの心 *page 44*
- 第4回 おかげって何だろう？ *page 48*

《こころの散歩道》第一回

「『大好き』と『ありがとう』

で幸せになる」

幸せになるにはどうしたらいいんだろう？

僕は、「大好き」と、「ありがとう」で幸せになれると思う。

僕は、去年の夏、とても幸せだった。今まで一つも出来なかった楽器が演奏出来るようになり、音楽祭に参加出来たからだ。

僕は今、四十八歳。妻と、中学生の長女、小学生の長男がいる。十二歳の時から、大好きな歌手がいて、僕の人生の思い出にはどれもバツクにその歌手の曲が流れている。いつも、その

歌手の歌を家や車の中で聞いたり、家族や友人とカラオケで歌ったり、ともかく大ファンなのだ。

それまで楽器は何一つ出来なかったが、二年前突然、「一曲でもいい、その歌手の歌をギターで弾き語りしたい」と思い立った。

そして、駅ビルの文化センターの「はじめてのギター」という教室に通い始めた。まさに「四十の手習い」である。

確かに、年を取ってから、習い事をするのは、それまでの経験が土台となり、新たな発見にも大きな喜びがあり、有意義なことなのかもしれない。若い時からずっと憧れていたことを習い始めるとするのは、久々に心ときめく瞬間だった。

教室に通って三カ月目。ちょうど、基礎を一通り教えてもらい、次のクールを受けるかどうかという時だった。

時々、ストレス発散に飲みに行くカラオケバーがあるのだが、その店のマスターが、「ギターを教えてあげようか？」と声を掛けてくれた。マスターはプロ並みにギターがうまくて、お店で生ギターで歌ってくれていた。「ぜひ、お願います」と即刻、返事をした。

マスターは僕の好きな歌手の歌を何曲か教えてくれた。いくつかのコードを覚えれば、弾ける曲だ。楽しくて仕方がない。毎週、金曜日の夕方五時、お店が開く前に一時間教えてもらって、何とか弾けるようになった。

家で家族にも聴いてもらうのだが、「パパ、

三曲だけにしてね」と渋々聴いてくれる。家族にとっては、習いたての下手なギターを、ジャカジャカかき鳴らして、だみ声で聞かされるのだから、たまったものではなからう。まるで漫画に出てくるガキ大将が「魅惑のリサイタル」と称してみんなの前で声を張り上げる、あの構図とそっくりだ。

そこで、「聴いてくれてありがとう」と、感謝の言葉を添えて約十五分のステージは終わる。

そんなある時、町内会の掲示板に野外音楽祭の参加者を募集するポスターを発見。自治体が地元の大きな公園で開催するらしい。「初心者大歓迎！ 音楽に貴せんなし」と書かれている。

清水の舞台から飛び降りる気持ちでエントリ
ーし、二倍の難関を乗り越えて、五分枠で音楽
祭に出演することが決まった。

それからまたマスターと猛特訓が始まった。
五分間、一曲に絞って、ギターと歌の特訓であ
る。マスターが手本を弾いて、僕がそれに続く。
スマホで録画し、再生して弱点を克服する。右
手のピックの使い方が難しい。家に帰ってまた
練習。マスターから、「歌手のまねをするので
はなく、君の素直な歌声と弾き方でやってもら
ん」とアドバイスを受け、それを毎日繰り返し
ていたら、ある時、ふっと、「ああ、この感じ
なのか」と悟るような時が訪れた。奇麗な音色
になったのである。今までのジャカジャカでは
ない、ふに落ちる音が出た。「ああ、この音

だ！」と。

そして音楽祭本番。家族も、友人、知人も応
援に来てくれた。緊張しながらも五分間、一曲、
思い切り歌った。拍手と声援を頂いて、とても
気持ちよかった。「みんな、聴いてくれてあり
がとう」と締めくくった。通り掛かりの見知ら
ぬ青年も、僕の歌っている曲を口ずさんでくれ
た。

大好きな歌手の曲を、自治体の音楽祭で、青
空の下、熱唱！ この感激は、今まで体験した
ことのないものだった。

それは、色々な方にお世話になって実現した。
憧れの歌手にも、ギターを教えてくれたマスタ
ーにも、辛抱して演奏を聴いてくれた家族にも、
音楽祭の場を設けてくれた自治体にも、見に来

てくれた友人、知人にも、「ありがとう」とお礼を言いたい。

去年の夏は大好きなことに挑戦して、僕の人生の新しい扉が開いた気がする。家族や周りのみんなにも喜びの輪が広がった。お世話になった方々に、「ありがとう」と感謝出来ることも幸せなことだ。

「大好きなこと」と「感謝」で幸せな夏が過ぎたことを、神様に御礼申し上げたい。

年を取っても新しい習い事をするのは遅くはありません。どうか、皆さんも「好きなこと」に挑戦して、お世話になった方々に「感謝」をして幸せになって下さい。



「『しか』なんて要らない」

二年前の秋、山の畑へサツマイモを掘りに行った時のこと、いつもの年なら芋はもう充分大きくなっているはずなのに、なぜかその年は、掘っても掘っても、土の中から出てくるのは、ラッキョウの親方くらいの物ばかり。しまいには心の中で、「なぜこれだけしか大きくなってないんだ？」そう不満に思ってしまった。

ところがそう思った瞬間、心の中のもう一人の私が問い掛けてきた。

「今お前は、これだけしか大きくなってないと思ったが、その不満は、いったい何に対しての不満だ？」

サツマイモは、芋づるさえ植えておけば、後は大した手間は掛けなくても大きくなるのだが、これは神様が大きくして下さるのだと、私は常々人に話してきた。そんな私が、「まさか、ひよつとして、神様に対して不満を思ってしまったのではあるまいな」。

そんなことがあって以来、私はそれまで何気なく使ってきた「これだけしかない」の「しか」という言葉がすごく気になるようになってしまった。

「しか」というと、こんなことを思い出した。

三十年前、三十五歳の時のこと。夏バテで自律神経がおかしくなり、どうしても物がのどを

通らなくなつて入院したことがあつた。食事ならまでも、水さえも飲めないのだ。水を飲むとコップを口元まで近付けると、水のおいが鼻に付いて、それだけで吐きそうになる。これには参つた。それでも入院して三日目、病院で支給された牛乳を恐る恐る飲んでみると、何と牛乳は飲めるのだ。うれしかった。涙が出るくらい、本当にうれしかった。

ところが五日目ぐらいになると、うれしさは嘆きが変わつていた。「五日も経つのに牛乳しか飲めない」と。

食べられないといえ、こんなこともあつた。五年前、六十歳の時、がんで胃の全摘手術を受けた。予定では、腹くう鏡を使つての手術で、おなかに五つの穴が開くだけのはずだったのだ

が、術後のおなかには、大きな手術痕が付いていた。どうも私のおなかには思つた以上に脂肪が付いていて、仕方なく切つたらしい。万が一の時はそういうこともあると、事前の説明を受けてはいたが、その万が一が起こつたというわけだ。

それでもおかげで術後の回復は順調で、食べることにすすぐに慣れ、十四日目には退院出来たのだが、ところが退院して二週間くらい経つて、だんだん物がのどを通らなくなつてきた。後で検査して分かつたことだが、食道と小腸のつなぎ目の直径が九ミリくらいになつていたのだ。手術後一カ月くらい経つてからよく出る症状らしい。こんなに狭くなつていたのでは、いくら食べようとしても食べられないのは当然だ

った。

そんなことなど思いもしなかった私は、毎日、必死になって食べようと頑張ったのだが、なかなか思うように物がのどを越してくれない。あまりにも食べられないので二カ月目の定期検査を一週間前倒ししての検査でそれが発覚、すぐに狭くなったつなぎ目を広げる治療を受け、それからは徐々にだが、食べられるようになった。

五年たった今では、胃が無いことを忘れて食べ過ぎて、後で苦しむことがよくあるのだが、しかし、胃が無いことを忘れて食べられるというのは幸せではないか。

その、必死で食事と格闘していたころの私はどんなことを思っていたのか気になって、その

ころの日記を開いてみたのだが、そこには、「ありがたいことに今日はバナナ一本と牛乳一本、それと栄養ドリンクが一本飲めた」。「今日はおかゆ、豆腐半分食べられた。ありがたい」と、食べられたことばかりが書いてあったのだ。食べられなくて苦しかったはずなのに、日記のどこを探しても、「これだけしか食べられない」と不満めいたことは一行も書かれていなかった。これには自分のことながら感激してしまっ



「しか」という言葉に続くのは、大抵が否定

的なことばかり。例えば、「ボーナスが十万円しか出なかった。釣りに行ったが一匹しか釣れなかった」と。でも決してボーナスは出なかったのではなく十万円出たのであって、魚も一匹は釣れたのだ。同じ事柄でも、捉え方一つで、喜びにでも悲しみにでもなるもの。不足を言ってもどうしてもならないことなら、言うだけ無駄。それどころか、不足を言えば言うだけ心がすさむ。それよりも、同じことなら、出来たことを喜んでいたいもの。

プールに通っている幼稚園児の孫が、「ジイジ、まだ五メートルしか泳げないんだ」と残念そうに言う。「そうか、でもすごいじゃないか。全然泳げなかったのに五メートルも泳げるよう

になったのか」。

出来なかつたことを中心にして嘆いて暮らすより、出来たことを喜んで、それを中心にして生きていきたい。だから、私には「しか」という言葉はもういらぬのだ。



「ずっと大切にしたいこと」

四十年あまり前、学生運動から距離を置き始めた私は、大学三年目に休学しました。勉強する意欲もなく、朝から晩までパチンコ屋に入り浸っていました。ある日、「このままではいかんなあ」と思い立ち、アパートの近くにありるショッピングセンターの中華レストランで働くことにしました。週六日、一日九時間の勤務です。

「いらっしやいませ」「ご注文は何にされますか」。毎日同じ調子で注文を聞き、出来上がった料理をテーブルに運びます。単調な仕事なのですが、毎日、規則正しい生活を繰り返す中

で、しだいに心が安らいでいきました。

レストランでは昼時、忙しい合間をぬって順番に厨房の奥で昼食をとります。いつも決まっています、丼いっぱい、白飯とキュウリの醤油漬。それを十分ほどでかき込むのです。

おなかをすかしている貧乏学生とはいえ、毎日そんな賄いが続けば飽きてきます。ところが、まるで見計らったかのように、チーフが、「注文と違ったから、これ食べて」と、間違ってしまった料理を時々食べさせてくれます。チンジャオロース、酢豚、大正海老のケチャップ煮など、時折のごちそうが楽しみでした。

仕事に慣れてくると、中華料理の作り方を習ったり、喫茶コーナーでパフェを作らせてもらいました。定休日の前日には、仲のよいコック

さんの小部屋でお酒を飲み交わします。仕事の愚痴、奥さんへの不満、いずれは独立して店を持ちたい、といった話の後で、いつも最後に、

「せっかく大学に行かせてもらっているんだから、ちゃんと卒業しろよ」と説教されるのです。

一年ほど経ったころ、私はレストランでのバイトを辞め、大学生活に戻ったのでした。

大学を卒業した私は、地元で高校の教師になり、その後、転職して結婚。三人の子どもを授かりました。一番下の男の子が幼稚園に通うようになって、妻はパートで働き始めました。私も家事を分担し、時々夕食を作ります。得意料理はもちろん中華。出来立ての熱々を一品ずつ食卓に出し、妻も子どもたちも、「おいしい」

と大喜び。私はその度、中華レストランでバイトしたころのことを懐かしく思い出していました。

しかし、何年かしてふと、「あの時、チーフが『間違って作ってしまったから、食べて』と出してくれた料理は、間違ったふりをして、私のために特別に作ってくれていたのではないだろうか。きっとそうに違いない」。そんな思いが湧いてきたのです。若かったとはいえ、自分のことばかりに気をとられ、チーフのさりげない思いやり気付かなかった未熟さを思い知らされました。

その数年前に、こんなこともありました。次女が誕生し、私たち家族は少し広めの社宅に引っ越しました。花が大好きな妻は、道路に

面した長い堀をとでも気に入っていました。いくつものプランターに花を植えて並べ、家の前を通る人は、「すてきなフラワーロードですね」と喜んでくれました。

春先、妻はプランターに花の苗を植え、出来上がったプランターを私が並べていた時、三歳になった長女が草刈り鎌を手にしているのを見ました。すぐに鎌を取り上げ、「駄目じゃないか。こんな危ないものを持つちゃ」と叱りつけると、長女はびつくりして、大声で泣き始めました。

「きつく叱り過ぎたかな。でも、危険な物は手にしないように、厳しく教えておかなくちな」と自分を納得させていたら、通りすがりのおばあさんが私のそばに来て、穏やかな声で話

し掛けてきました。

「そんなに頭ごなしに叱っちゃいけませんよ。小さくても、子どもは子どもなりに、お父さんのことを思い、お手伝いをしようとしているんですよ。そんな尊い心を授かっているんです。大切にしておいて下さいね」

幼いながらも、私のことを思いやり、手助けしようとしていた我が子の尊い心の動きに気が付かなかった自分、頭ごなしに叱り、しかもそれを正当化していた自分が恥ずかしく思われませんでした。

私は今、六十三歳。結婚した二人の娘は、それぞれ二人の子どもを授かりました。普段は妻と二人暮らし。娘たちが帰ってくると、とても

賑やかになります。

私が朝、部屋を掃除していると、三歳の孫が、「じいちゃん、僕もする」と言つて、私の持っているのはたきを取り上げ、障子をパンパンとたたき出します。私は、「あ、障子が破れる。しなくてもいいから…」と言いつつ、そうなるのをぐつと我慢して、「ありがとう。お手伝いしてくれるの。お利口だねえ」とにっこり笑つて、孫を褒めます。また、掃除機を掛けるのに椅子をずらそうとすると、「僕も」と、一緒に椅子を持つとうします。時間が掛かっても一緒に運んで、「じいちゃん、うれしいなあ。ありがとう」とお礼を言います。

そんな時、あのおばあさんの、「子どもが授かっている尊い心を大切にしてくださいね」とい

う言葉を思い出すのです。意識せずにさりげなく思いやりが受け止められ、素直にお礼が言えれば、もっとうれしいのですが…。



《こころの散歩道》第四回

「ラスト一周の記憶」

私は小さいころ、カタツムリを見るのが好きでした。雨が降ると少しウキウキしながら、道端や公園にカタツムリを探しに出掛け、見付けてはじっとその様子を眺めていたことを思い出します。

そういうえば、人は強い者や早い者に熱狂したり、憧れたりしますが、反対にすぐ弱い者や遅い者にもなぜか魅力を感じ、心を揺さぶられます。カルガリー冬季オリンピックで、ぶつちぎりの最下位だった、スキージャンプのイギリズ代表選手。映画になったことでも知られるジャマイカのボブスレーチーム。負けても負けて

も走り続けた地方競馬の競走馬。みんな大人気になりました。

「いつたい、その人気の秘密はなんだろう…」
そんなことを考える時、私の中学高校時代の出来事が頭に浮かぶのです。

私は中学生になって、部活に卓球部を選びました。しかし練習がきつかったり、なかなか上達しなかったりで、三カ月ほどしてさぼりがちになりました。ちょうどそのころ、市の大会で新人戦があり、私も出る予定だったのですが、「どうせ簡単に負けちゃうし…」という気持ちから、体調が良くないなどと適当な理由を付けて参加しませんでした。そうすると、わざと試合を避けたことに、どこかモヤモヤした思いが、

心の奥の方に居心地悪く座り続けたのです。

す。

時は過ぎ、高校二年生の時です。体育祭に向けて、誰がどの種目にエントリーするかを決めていました。どんどんと決まっていくなに、最後まで男子の一五〇〇メートル走に出るメンバーが決まりません。

「みんな僕より速いやん！」と拒み続けましたが、彼の切ない表情にとうとう押し切られ、「分かった…、出るよ…」と引き受けてしまったのです。

各クラスから二人のメンバーが必要です。その時に体育祭の実行委員をしていたのが私の友人でした。いつまで経っても誰も出たがらないので、私に、「すまん、出てくれないか？」と、

もう一人、私と同じように決まったクラスメートがいました。彼もあまり走るのが速くないようで、少し安心して当日を迎えることになりました。

とても困った顔で頼み込んでくるのです。私は思わず、「無理ムリむり！」と反射的に声を上げました。球技はそこそこ得意だった私も、走るのは短距離も長距離もすぐ遅かったので

当日です。「さぼろうかな」という気も少ししたのですが、中学の時のモヤモヤした記憶もよみがえり、一五〇〇メートル走の集合場所に向かいました。

ところが、一緒に出るはずのクラスメートが見当たりません。「あれっ？ さっき確か見か

けたのに……」と探しましたが、結局現れませんでした。

いよいよスタートです。周りはいかにも速そうな運動部の連中ばかり。私はといえば写真部です。「ヨーイ、ドン！」とともに二十人ほどが一斉に走り出しました。

「な、なんだ、百メートル走か！ これは……」
という勢いで全員があつという間に私から離れていきます。付いていこうにも付いていけないので、ポツンと離れて走っていると、三百メートルのトラックを五周するそのレースの三周目辺りから、一人、二人、三人……と少しずつ追い抜かされ、四週目には、とうとう全員が私を周回遅れにしまいました。という事は、ラストのトラック一周、全校生徒を前にして私は

一人で走る事になってしまったのです。

私は恥ずかしさでいっぱいになりましたが、照れ隠しするために、苦笑いを浮かべ、みんなに手を振りながら走りました。友人たちが大笑いしながら私を指さしているのが見えました。写真部の先輩が私の姿をフィルムに収めているのも見えました。

ゴールすると、「かっこわりー」、そんな言葉が口をついて出てきました。

卒業して、高校時代の仲間と集まった時、体育祭の話題になり、私の周回遅れの姿が話のネタになりました。その時、その場にいた一人が私につぶやいたのです。

「あの時はゴメンな……」

彼は一五〇〇メートル走にさぼって出場しな

の、そのすがすがしさなのです。

かった当時のクラスメートでした。私の方はす
っかり忘れていたのに、彼の方はずっと気にし
ていたことを知りました。

私は中年と言われる年齢になりましたが、今
でもカタツムリを見付けるとじっと眺めている
ことがあります。

小さいころ「ウサギとカメ」の童話を読んで、
「いくら速くても油断してはいけないんだなあ」
と教わりました。加えて今は、いくら遅くても
逃げなかったカメは、「かっこいい！」と感じ
ます。結果がどうであれ、ただ自分のペースで
最後まで歩むこと、そのことに価値があるんだ。
そう気付かせてくれたのは、私の体育祭の記憶



《あなたへの手紙》第一回

「イライラ／がんの不安」

おはようございます。岡山県お久く教会の小林眞です。まず最初のご質問です。

「私は四十歳の会社員です。思ったようにならないとすぐにイライラしてしまう自分が嫌い、そんな自分を何とか直したいと思うのですが、何かいい方法はありませんか？」

愛知県の隆雄さんからこんな相談を頂きました。

ありがとうございます。そうですね。あなたも、ですか。私も若いころはすぐに腹を立てたりイライラすることがよくありました。そんな

私も今では六十六歳、若いころに比べると少しは感情のコントロールが出来るようになりましたよ。

で、その私のコントロールの方法なんですが、どんなことでも、前向きに考えるために、まず「おかげさまで」と最初に「おかげさま」という言葉を付けてみることにしたんです。

例えば、車の運転中、道路工事なんかに出くわして渋滞に巻き込まれたとします。そんな時、以前の私だったら、「また工事か」と、こんなことにもすぐに腹が立っていました。

ところが、今は渋滞に遭ったらまず、「おかげさまで」を付けてみるんです、無理矢理にでも。そうすると、もう、たとえ渋滞でも、いいところを探すしかないんですね。

「おかげさまで、うーん、こんなに混んでた

ら…、スピードを出し過ぎることもないし。安全運転をしなさいということかな」。一旦こう思えたら、もうしめたもんです。ちよつとでも心が落ち着くと、今度は色んなものが見えてくるんですね。

渋滞の原因の工事ですが、一体誰のためにやっているのかと言うと、実は私たちドライバーのためでもあるんですね。それで今度は工事をしてる人たちを見ると、夏場なんかもう、みんな真っ黒に日焼けしていて、たとえ仕事とは言え、すごく頑張ってくれている。それで、こちらはと言うと、冷房の効いた車内でそれを見ているだけ。そう考えると、もう、腹が立つどころか、逆に何か悪いような気持ちにさえなっ

てくる。

どんなことでも、「おかげさまで」を付けるのと、もうありがたいことを見付けるしかないんです。例えば病気で入院しても、手術がしんどかった、お金が随分掛かった、ではなく、「おかげさまで手術が出来た、おかげさまで入院費が払えた」になるんですね。起こったことは同じでも、そう考える方が気分が良くなると思いますせんか？

どうでしょうか。隆雄さんも、ちよつとでもイラッとしたら、「おかげさまで」を付けて物事を見てみませんか。すぐには出来ないかもしれませんが、やってるうちに、だんだん出来るようになりますよ。

金光教の教祖様は、何事にも前向きな生き方

をされてきたのですが、近くの教会へ行つて先生から、そんな話を色々聞かせてもらうと、とても参考になると思いますよ。

次は東京のアパートで独り暮らしをしている「はるみさん」という、三十歳の女性からです。

「今年の春、乳がんの治療を続けていた母が亡くなりました。父も私が小学生の時、大腸がんで亡くなっていて、それを考えると私もガンになるのではないかと不安で仕方ありません。検診を受けるのも怖い気がするし、どうしたらいいのでしょうか」

このような内容です。

そうですか、ご両親ともがんで亡くなられた

んですか。あなたが不安になる気持ちはよく分かりますよ。

私も若いころ、二〜三回胃のレントゲン検査を受けて、それからずっと検査をしていなかったんです。バリウムを飲むのもしんどいし、おまけに結果も怖いし。ところが五年前、のどの違和感で、病院へ行つて検査を受けたら、何と胃にがんが見付かったんです。

それで、胃を全部取つてからこの五年間、検査ばかりしてきたんですが、もしそれでがんが見付かつて今度は初期ですから、発見出来てラッキー、見付からなかったらもっとラッキー、ずっとそんな気持ちで検査を受けてきました。なので、検査の結果に、全然不安はなかったですよ。

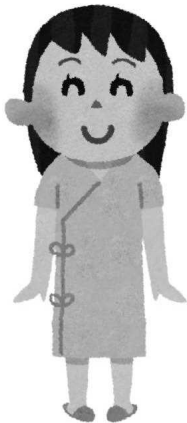
はるみさん、たとえあなたのご両親ががんになったと言っても、あなたががんになると決まっている訳ではありません。この先病気になるかならないかなんて、そんなことは誰にも分かりません。そんな、決まってもないことを気にばかりしていたら、不安になるだけです。取り越し苦労は体に毒、先は楽しみにするもので、先に先に、悪いことはあまり考えない方がいいです。

私は毎日、朝目が覚めたら、「お、生きてる。ありがたい。食事が食べられる、ありがたい」と、普通の人なら当たり前のことかもしれないことを喜んで暮らしています。

朝、目が覚めたこともおいしく食事が食べられたことも、それは全部事実です。そんな毎日

のありがたい事実を大切にしていると、ありがたいなと思えることが、病気をする前よりもたくさん見えてきましたよ。はるみさんもぜひ、出来ることが当たり前だと思わず、喜ぶ稽古を試みて下さい。すぐに、という訳にはいかないかもしれませんが、楽しい気持ち広がってきますから。

それでも心配がなくならないのであれば、私のように、「見付ければラッキー」くらいの気持ちになって検査を受けてみてはいかがですか。



《あなたへの手紙》第二回

「膝の痛み／子どものしつけ」

おはようございます。昨年、北陸新幹線が開通した富山県にある金光教富山教会の三浦義雄です。最初に、八十代の女性から。

「私はこれまで入院したこともなく、元気に過ごしてきました。でも最近、ひざの痛みがひどく、歩くのがかなり不自由になってきました。

この先どうなっていくのか、すごく心配です」
このような悩みが寄せられました。

ありがとうございます。教会でも、参拝している高齢の方から、同じような悩みをよく聞きます。長い年月、体を使わせてもらい、痛い

ゆいがあるのは当たり前、と頭では分かっているても、さぞかし心配なことでしょう。

以前、年配の信者さんから、「ひざが痛い時には、ひざを始め、体へのお礼が足りないんだと思い、体の一つひとつにお礼を言うようにしています。そうすると、不思議に痛みが和らいでくるんです」という話を聞いたことがあります。

まずは、痛みにとらわれないことですね。とらわれすぎると、「全く歩けなくなるのではないか」といった心配や不安が起きてくるものです。「ひざが痛い」と感じたら、即座に、「長い年月、よく頑張ってくれてありがとう」と感謝し、「痛みを感じられるのも生きている証」と思い直して、命あることにお礼を言うように

心掛けてみてはどうでしょう。きっと痛みも和らいでくると思いますよ。

また、私の母も晩年、ひざの痛みで歩くのが難しくなりました。でも、少しでも歩けるうちに、岡山にある金光教の本部に参拝したいと願いを立て、お参りさせて頂きました。なだらかな丘にある参拝道を、一歩ずつ、「ありがとうございます」とお礼を申し上げながら、ゆっくりと歩かせてもらい、帰ってから、「ほとんど痛みを感じなかった。ありがたかった」と喜んでいました。

四代教主金光様は、

「出来ないと 悲しむよりも 出来ること

喜ぶべきと またしても思ふ」

というお歌を詠んでおられます。

年を重ねていくにつれ、出来ないこと、不自由なことが多くなっていきます。そんな時にこそ、このお歌のように、出来なくなったことを嘆き悲しむより、少しでも出来ることを喜んでさせて頂こうという、前向きな姿勢を持たせてもらいましょう。神様もきつと力を貸して下さいますよ。

次は、関西在住の三十代の男性からのお尋ねです。

「私にはもうすぐ三歳になる息子がいます。

やんちゃ盛りで言うことを聞かず、手に余ることもしばしばです。妻はそんな時、いつもではありませんが、大声で叱ったり、時には手を上

げることもあります。育児の大変さは分かるのですが、『もうちょっと優しく論じたら』と言うと、『生優しくしていたら、図に乗って何度も同じことをするし、イライラする』と言い返します。子どもを叱ったり、たたいたりすることについて、金光教ではどのように考えますか」



このような質問です。

ありがとうございます。あなたは多忙な中で、家庭では育児にも協力されているのでしょうか。でも、「子どもを叱り、時にはたたくのも必要」というような子どものしつけ方には疑問を持つ

ておられるんですね。

幼いころ親にたたかれて育った方から、何度か話を聞いたことがあります。どの人も、ずっと理不尽な思いを持ちながら逃れることが出来ず、心もひどく傷つけられ、そのことが原因で、大人になってもつらく、苦しい生き方を強いられていたのを感じました。そのような話を聞き、深い苦しみの一端に触れるにつけ、子どもをたたいてしつけることを正当化してはいけない、という思いを強くしています。

人は皆、神様から命を賜り、神様の愛しい子どもとして生かされている掛け替えのない存在です。子どももまた、神様の愛しい子どもとして、親に託されたこの世に一つしかない宝物です。その尊い命を守り、健やかな成長を願い、

養育することが、神様から願われている親の努めだと思えます。

金光教祖は、「子どもを叱り叱り育てるな」。

「子どもの頭をたたくより、自分の頭をたたけば、すぐおかげになる」と教えられています。

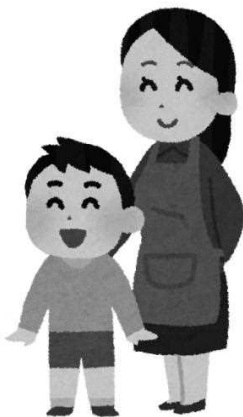
しかし、とりわけ幼児期の子どもが言うことを聞かない時、叱ったりたたいたりせず、成長を見守りながら育てさせて頂くには辛抱が要ります。時には、親としてのあり方を改めていく勇氣も要ります。自分たちの力だけで育てようと思ふとしんどい。何か支えがあるといいですね。

あなたのお子さんと年代は違いますが、以前、私の娘が高校生のころ、家出をし、何度電話しても帰ってこない、ということがありました。

幸い、すぐに帰ってきたのですが、その間、た

だただ無事を神様をお願いし、娘を信頼して待つことしか出来ませんでした。でも、神様にお守り頂いているという確信があったので、娘との関わり方を反省しながら、落ち着いて待つことが出来ました。

優しく子どもを諭していこうという、あなたの今の気持ち、大切にして下さいね。ご夫婦で教会に参拝され、教会の先生のお祈りを支えとしながら、神様のお守りを頂かれるのはとても心強いことですよ。



「父の暴言」

金光教のボランティア活動」

おはようございます。私は名古屋にあります

金光教今池教会の浅野弓と申します。今朝は、十八歳の女子高校生から、こんなお悩み相談を頂きましたので、一緒に考えていきたいと思えます。

「時々、金光教の朝のラジオ放送を聞いています。金光教では、親孝行が大切とよく言ってますね。でも、私の父はとても短気で、何か気に入らないことがあると、すぐ『誰のおかげで生活していると思ってるんだ。出て行け』と怒鳴るんです。もう、うんざりです。大学への

進学を機に家を出たいと思うのですが、そうすると祖母の介護で疲れている母を見捨てることになるかなって思うと、踏ん切りがつきません。どうしたらいいでしょうか」というご相談です。

ありがとうございます。

うーん、それは迷いますよね。お母さんを手伝って、おばあちゃんの介護をしているんですよ。優しいお嬢さんなんですね。でも、びっくりしました。まだ、「誰のおかげで生活していると思ってるんだ」と怒鳴るお父さんがいるんですね。昭和の時代のお父さんには多かったですね。そんなことを言われたら、「もう世話になりたくない。私一人でバイトしてでも、大学へ行く」と言いたい気持ちは分か

ります。「家庭内のパワハラ」ですよ。

でも、少し考えてみて下さい。お父さんは、あなたが生まれた時から今まで、ずっと家族のために働いてこられたのだと思いますよ。「誰のおかげで？」と言われたら、まさにお父さんのおかげで生活してきたのも本当なのです。

そのことにお礼を言ったことがありますか？
これから、お父さんがそんな暴言を吐いたら、腹は立つでしょうが、その腹立ちを、ちょっと押さえて、「それはお父さんが一生懸命働いてくれているおかげだと思います」と言ってみたら、どうでしょう。お父さんは、「ウム：分かればいい」となるんじゃないでしょうか。きっとそれ以上は言わないと思いますよ。お父さんだって、あなたたち家族がいるおかげで、頑

張ることが出来ているのですから。

さて、進学の問題ですが、お母さんやおばあちゃんのご事情が気になるというなら、家を出るとはお勧めしません。もう少し、お父さんのすねをありがたくかじらせてもらったらどうでしょう。きっとお父さんもおばあちゃんもお母さんも喜んで下さると思いますよ。そして、家にながらも、下宿したつもりになって、生活してみてください。お父さんとの関係も変わってくると思います。大学生活を楽しんで下さいね。

次はフリーターをしているという二十歳の女性からのお尋ねです。

「ボランティア活動に興味があります。ネットですべて調べてみたら、色々なボランティア活動が

あつて、迷ってしまいました。宗教団体のボランティア活動も多いようです。一般のボランティア活動とどこが違いますか？ 友達は宗教団体のボランティア活動は、きつと入信させられるから怖いよ、と言うのですが、本当でしょうか？ 失礼なことを聞いているかもしれせん。ごめんなさい」というお尋ねです。

ご質問ありがとうございます。

ちつとも失礼じゃ、ありませんよ。思いやりのある女性なんだろうな、つて勝手に想像しています。私も、若い時から、色々なボランティア活動をしてきたんですよ。その初めは、フィリピンで裸足で生活している子どもたちがいるというニュースを知って、「何とかしたい！」

つて思つて、古い運動靴を集める活動をしました。とてもたくさん集まったので、フィリピンにある金光教の施設に送りました。さぞ喜んでもらえただろう、と思つたのですが、後から施設の人たちに大変ご苦労を掛けたことを知りました。靴の大きさに合つた子どもを探すのに大変だつたとか、靴の好き嫌いで子どもたちもめたんですつて。もつと相手の身になって、活動すれば良かったなと反省しました。

また、靴を送る運送費がとても高かつたのも痛手でした。それからは物を送る時には運送費の募金もお願いしています。私が今も、ボランティア活動を続けているのは、あの時の気持ちが原点です。若い時の色んな経験は全て宝物になると思いますよ。

さて、一般のボランティア活動と宗教団体のボランティア活動はどこが違うかというお尋ねでしたね。ボランティア活動の基本は、人のためになりたい、世のお役に立ちたいという思い

の表れですから、そこは一緒だと思います。でも、強いて言ってみると、例えば金光教の場合ですと、人は皆、神様の愛し子、どの人も幸せになって欲しいという神様の願いがあることや、「人が人を助けるのが人間である」という教えが活動のベースになっているように思います。ボランティア活動を続けていくと、なかなかしんどい時もあります。そんな時には、こうしたベースがしっかりしているかどうかがかかり重要です。思います。

そして、入信を強要させられないかというご

心配の件ですが、少なくとも金光教では致しません。金光教のホームページでも、色々なボランティア活動を紹介していますから、調べてみて下さい。

みんなで助け合って、住みよい世界を目指しましょうね。



《あなたへの手紙》第四回

「参拝すると得か／夜泣き」

皆様、おはようございます。

東京都麻布教会の松本信吉です。今日は神奈川県
川島の男子高校生・A君の質問を紹介します。

「母は金光教の教会に参拝しています。母から、『あなたも教会に参拝しなさい』と言われますが、どうして参拝しないといけないのですか？ 参拝すると何か得をすることがあるのですか？」という質問です。

ご質問ありがとうございます。「何か得をすることがあるか？」ですか。なるほどねえ。一言で言えば、「ありますよ」。

私の知ってる小学三年生の男の子が、毎週二回、柔道場に通っています。そして、柔道の先生から大変可愛がられています。それは、柔道の上^{うま}手^まい下手、強い弱いではありませんよ。毎回、遅刻せず、礼儀正しく、きちんと通っているからです。

神様と参拝者の関係もこれと似ています。

あなたは朝、起きた時に、お父さんやお母さんに、「おはよう」とあいさつをしますよね。

金光教の神様は天地金乃神様です。天地金乃神様は、天地の間の全てを生かす神様で、私たちは「親神様」と呼んでいます。

神様は人間の親のようなもの。いつも私たちを見守って下さっているんですよ。ですから、お母さんは、教会に参拝して、「神様、おはよ

うございます。今日も一日、よろしくお願います」と祈っておられるのではないですかね。

「神様を親と思つて信心をしていけば、目に見えないところは神様が守つて下さる」という教えもあります。

毎朝の参拝は出来なくても、教会にお参りした時に、「神様、いつも守つて下さりありがとうございます。今日からもお守り下さい」とお願いすること、きつと、神様はあなたのことを我が子のように可愛がつて下さると思ひますよ。

また、教会に参拝すると、先生のお話が聞けます。そこに生きるヒントがあります。そして、悩みや疑問やお願い事があつたら、先生に聞いてみて下さい。先生は、あなたと一緒に、その

ことを神様にお願ひして下さい。

あなたも教会にお参りしてみして下さい。きつと、何か得することがありますよ。

次は、埼玉県の主婦の方からの悩みです。

「娘が生後十カ月となり、とても可愛いのですが、主人も一緒に面倒を見てくれていますが、家にいる時間は短く、あまり当てに出来ません。実は最近、娘の夜泣きがひどく、私も疲れてしまします。どうしたら上手に子育て出来るでしょうか」との質問です。



ご質問ありがとうございます。夜泣きつて大変ですよ。私も娘が一歳に満たないころ、妻があなたと同じように子育てに疲れた時がありました。夜、ずっと娘が眠らないので、抱っこして部屋の中を歩き回り、夜が白々と明けてきた思い出があります。

そのころは、おむつを替えてもまたすぐにウンチをしてしまったり、たっぷり抱っこした後、ママもちょっと休憩しようと、お布団に寝かせてみたら大泣きしたり、抱っこしてあげようとしたけれど、体を反らせて泣いたり、うなったり。何か、赤ちゃんにダメ出しされている気分になることがありますよね。

職場だったら、上司が褒めてくれたり、同僚が励ましてくれたりするのには、夫は仕事でいな

いし、赤ちゃんが何も言ってくれないのは分かってはいるけど、やるせないですよ。

でも実は赤ちゃんは、「ママ、夜泣きに付き合ってくれてありがとう」「またウンチしちゃった。ごめんね」「ちょっと眠りが浅かっただけなんだよ」などと、ママに語り掛けているのだと思います。そして、いつまでもいつまでも夜泣きが続くものではありませんよ。

金光教の四代教主金光様のお歌に、

「ちちははも 子どもとともに 生れたり

そだたねばならぬ 子どもちははも」

という歌があります。

完璧な子育てを目指す必要はありませんよ。

最初から上手に子育て出来る人はいません。赤ちゃんの成長は、父親、母親の成長の過程でもある。夜泣きの苦勞を赤ちゃんと共にすることで、次の課題にチャレンジ出来、だんだんと一歳の親、五歳の親、十歳というふうに、子どもと共に成長するつもりでいいのではないのでしょうか。

妊娠した時も、つわりや体調の変化でつらいことがあったと思います。でも、それは赤ちゃんがおなかの中で大きく育っていく証でもあった訳ですよ。

妊娠も出産も育児も、母子共に育つことで母子共に鍛えられ、たくましくなっていくのではないのでしょうか？

そして、自分だけで頑張ろうとせず、家族、

親族、ご近所などお願い出来る人や、教会でもいいですよ。子育て経験のある人を頼って、みんなで子育てするのも楽しいですよ。
お母さんも、大変だと思いますが、先を楽しんで頑張ってください。



《先生のおはなし》

「祖父を辿り」

兵庫県・志筑教会 地田治美

日本で一番初めに創られたと、国生み神話で語られる淡路島。ここには七つの金光教の教会があり、私が奉仕している教会はそのうち一つです。

神様をお祭りする部屋に、大きな額縁に入ったおばあさんとおじいさんの白黒の顔写真が掲げてあり、幼い頃、この写真の人は誰かと両親に尋ねました。おばあさんは教会を開いた初代の先生、その隣の長いあごひげを生やしたおじいさんは二代目の先生だと知りました。今では、あごひげ先生の隣には私の祖父の写真が並んで

います。

昨年の春、仕事で京都の亀岡へ行きました。そこは祖父が生まれ育ったところで、自ずと祖父のことが思い起こされました。

祖父は軍人として身を立てていましたが、三十歳の時に大病を患い、再起不能と診断を受けました。この先どのようなように生きていけばいいのかと希望を失いそうな時、療養のために訪れていた淡路島で金光教と出会います。二代目のあごひげ先生から教えを受け、助かりたい一心で神様にすがりました。さらに、「教会で神様の御用をすれば助かる」と、先生の導きのままに三十五歳で金光教の教師となりました。二年后あごひげ先生亡き後、教会を継ぎました。

私が五歳の時、祖母が病気で寝た切りになり

ました。今でこそ、介護保険制度や介護施設が整い、いろいろなサービスが受けられますが、当時は家庭の中で家族が介護するのが当然といった時代でした。

朝、昼、夕、三度の食事は母が食べさせてあげ、週に一、二回父と祖父と二人掛かりでお風呂に入れてあげていました。そして祖父は必ず夜寝る前に、お湯で絞ったタオルで祖母のおしりを拭いてあげて、紙おむつを整えてから布団に入っていました。祖母が亡くなるまで八年の間、毎晩毎晩していました。「おじいちゃんはやさしいなあ、男の人でもこういうことするんだなあ」と幼いながらに胸を打たれ、その姿が一番心に残っています。

祖父が亡くなって数年後に、一冊の大学ノ

トが見付かりました。祖父が大切にしていたと思われる言葉や教え、また、あいさつの原稿などが書かれていました。

特に目に留まったのは、教師勤続四十年の賞を受けた記念の、信者さん達へ向けてのあいさつの原稿で、次のように書かれていました。

「再起不能と言われました大病にかかり、我が道のおかげをこうむり、七十五歳までも生きながらえておりますことは、信心のおかげと日々感謝しております。

家内は二十一歳で私の元へ嫁いで来ました。が、それから今日まで四十数年の間、不平も言わず、ただ黙々と私のような短気でわがまま者の世話と、七人の子どもを生み、その育成に献身的に尽くしてくれました。

殊に昭和十三年、私が戦争に招集され、五年間、皆さんの温かき援助あつてのことでありましたが、教会の御用に当たり、留守を守つてくれました。

また、戦後の筆舌に尽くせぬ生活の苦しみに堪え抜いてくれましたことなど思いますと、感謝の気持ちでいっぱいあります。そればかりでなく、私は精神的にも物質的にも私的にも公的にも、苦しい時がしばしばありました。しかしどのような苦難の時でも、私を助けて心の支えになってくれました。

家内も元気で、この席で共々に皆様にお礼が申し上げられないことを誠に残念に存じます。しかしながら、脳卒中を起こしてそのまま死亡する人も多いのに、寝たきりで動けぬながらも、

生かされておりますことはせめてものこと、有難いと思っております。皆さんからご心配もして頂き、祈られております家内は幸せ者であります。

四十年の表彰を病床の家内にも喜んでもらい、余命のある限り御用に勤め、おかげをこうむりたいと存じます」と、このように書かれていて、支えとなつてくれていた祖母への感謝の思いがあふれていました。

この文章を読んだ時、幼い頃、おばあちゃんのお尻を拭いてあげたり、お世話をするおじいちゃんに優しいなあと感じていましたが、それは優しさだけではなく、あふれんばかりの祖母への感謝の思いの現れでもあったんだと強く感じました。

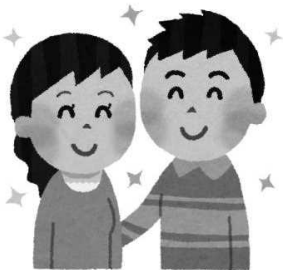
さて、私は結婚して十八年。祖父と祖母のように、支え合い、感謝し合える夫婦でありたいと思ひ、心掛けているつもりですが、ある時夫から、「お前は感謝の心が足りない！」と言われました。

大変シヨックでしたが、あることが浮かびました。夫に対して感謝どころか、着替えて脱いだ服を、いつも脱ぎっ放しにしていることを不満に思っていました。その思いを改めようと、「お世話になるすべてにお礼の心」という教えを元に、夫が脱いだ服をお礼の心を持って畳んでみようと思ひ及びました。

夫が今日も元気に仕事に出掛けられたことにお礼。夫と共に私も今、命があるからこそ、こうして服を畳むことが出来ていることにお礼。

夫の体を守ってくれる服にお礼。お礼を見つけながら毎日服を畳んでいるうちに、不満に思う気持ちは日に日に和らぎ思いやりが増していきました。

そして出張や会議が増え、普段の会社の制服以外に、ワイシャツにネクタイを締め、スーツを着ることが多くなった夫から、ある朝ネクタイを結びながら、「いつも準備してもらってすまないな。ありがとう」と言ってもらえました。少しは祖父と祖母に近づけたかな…とうれしく思えたのでした。



「ピンチなんて関係ない」

金光教の集会で行われた発表や講話などを録音で紹介する「信心ライブ」。今日は、長野県・金光教赤穂教会の佐々木真雄さんが、平成二十六年十月二十日、金光教玉水教会でお話されたものをお聞き頂きます。

私は、結婚が遅くて、四十六歳で結婚させて頂いて、五十一歳で長男を頂きました。子どもが小学校三年の時に、市内の、野球のリトルリーグというのに入ることに決まったんですね。私が六十歳。

それで、せがれを連れてですね、そのチーム

に行きました。そしたらね、初めて会うコーチもある訳です。そのコーチに向かって、親子で帽子を取って、「よろしく願います」と、こうやってごあいさつしました。そしたら、朝日に頭が光ったみたいなんです。それを見てかどうか分からないんですが、「やあおじいさん。ご苦労さんです。大変ですなあお孫さんのために」。こう言われた。せがれはムツとしてましたですね。

そういう思いをしながら、ずっとやってきたんですけれど、せがれが入って三年間、試合に出してもらえないんです。一回も出してもらえない。三年、四年の時にもう下が何人か入ってきますからね。それにも抜かれているんですよ。せがれがひよっとしたら、辞めるって言うか

なと思ってました。そう言ってきたも仕方がないなというふうに思っていました。で、せがれは何をしているのかと言うとね、後輩が打って出たバットを片付けたり、ヘルメットを片付けたり、そういうことをずっとしてました。

で、そのおかげですすね、細かいことに気が付くようになったんです。神様は無駄なことなさらんなというふうに思うんですが。それでも、まあそういうことを踏まえながら、せがれは一生懸命やってくれておりました。

それですすね、紅白戦をするといった時にですすね、いよいよ、投げるピッチャーがいらないということ、
「おい、佐々木、投げてみる」と
言われたらしいですすね。で、投げた。投げさせてもらった。

「おお、いいじゃねえか」。それからですね。「あいつをちよつと試合に使ってみるか」ということで、使ってくれることになった。そして、結構抑えるんですよ。目を疑いましたけどね。

もうそのマウンドにいたことだけで、ありがたい訳ですよ。それで、投げさせてもらってる。ボールを握ってる。今までね、ベンチサイドでご利用してたのが、晴れ舞台ですよ。ねえ、ピッチャーなんて本当にありがたい。そこで一生懸命投げる訳。それでねえ、場面は、ヒット一本出たらサヨナラ負けのところだった。

私はね、もうそのうれしさですよ。ね。「ああ、良い場面を与えてもらって、このピンチで彼は育てられるんだ」と、心の中で叫んでました。

「何でもいから思いつ切り投げろ」。ありがたいことをさせてもらってるんだから、結果はどうであれ一生懸命投げれば良い。

そうするとね、心配というよりも、もうお礼のことが、どんどんどんどん出てくるんですよ。ああ、今日まで元気な体があったからこういうことが出来た。今日まで我慢したから、こういうことになった。で、更に、このピンチで彼が育ててもらえるんだ、ということだね、考えたらもう心配どころか、お礼しかないんですよ。そうすると、ありがたい心がこう膨らんでくる。ピンチなんて関係ない。

とにかく、彼がおかげを受けて育ててもらえるんだという、そこに力点が入りましたのでね。本当に氣を楽にして観させてもらいました。結

果はその試合は抑えて、勝ち投手になったんですけれども。

先程も申しましたように、お礼が先、お願いが後。まずお礼ですよ。お礼をさせて頂いてると、本当に心が開けてくる。心配が飛んでっちゃう。心配どころじゃない。やはり、お礼をすることがいっぱい次から次へと出てくる。

何かこう特別なことが起きた時、そういうふうな時には、やっぱりその事柄に氣を取られてしまつて、そっちへ心が行つてしまふ。大変な時こそ、一大事というふうな時こそ、お礼が後回しになってしまふ。次から次へと色んな悪いことを思い浮かべてしまふということになる。

これは、やはり、何事があるうがお礼が先に出てくるという生き方を身に付けさせて頂かない

かんというふうに思うんですが。

やはり、四代金光様が、「お礼が先、お願いが後」ということを例えて、「上着を着てから下着を着る人はいないな」と教えて下さっていますけれど、本当にそのお礼を先にさせて頂く。心底お礼をさせて頂くということによって全てが整ってくる、そういうことを思う訳であります。

野球からそういうことを学ばせて頂いて、自分のせがれの生活を通して、私にいろんなことを教えて下さる。ありがたいことだなあというふうに思う訳であります。

いかがでしたか？

このお話のように、逆境に立たされた時には、

つつい不安なことを思い浮かべてしまいがちです。

しかし、大切なことは、神様のお働きの中で、たくさんの人に出会い、たくさんの人に支えられ、ここまで成長出来たこと。そのことに、まずお礼が出来ることによって、ありがたい世界が広がり、そこから一步、前に足を踏み出せるのだと思います。



《信心ライブ》第二回

「おっぱいの力」

金光教の集会で行われた発表や講話などを録

音で紹介する「信心ライブ」。

今日は、金光教福岡教会の吉木美智雄さんが、平成二十年十月二十八日に、金光教若松教会でお話されたものをお聞き頂きます。

お話の中で、吉木さんが命の誕生を通して気付かれたことを一緒に聞かせてもらいましょう。

人間の赤ちゃんが生まれましたら、へその緒がついておつても、母親のおなかの上に乗せましたら、母親の乳房を指して這っていくんだそうで

す。そのへその緒の長さも生まれてから母親の母乳に赤ちゃんが届くまでの長さがあるんだそうです。そして、触ると同時に母乳が出だすという。

まさに母親と子どもとの間の「あいよかけよ」だろうと思うんですね。母親があつての子どもであり、また子どもが吸うからそのために母乳が出る。その働き合い。その初乳を飲むことによつて、免疫力が高まったりとか、色んな働きをその子どもが頂くことが出来る。

そして、お腹いっぱい母乳を吸いましたら、赤ん坊は寝る。すぐ寝るんだそうです。この寝ることとがいいそうですね。母親と共に赤ん坊を胸に抱いたまんま、しばらくの間、一時間、二時間休ませて頂くことによつて、子どもの精神安定上もの

すごい働きが生まれてくるというんですね。今の医学で分かっている。

これは今、欧米なんかでは、そういうことをさせるんだそうです。子どもを抱いてすぐ初乳を飲ませて、その母親と共にはばらく休ませる。そうしましたら、「安心母体を持つ」と言われるんですが、その子どもがしばらく休むことによって、これから先、成長する子どもたちの精神の上で大きな働きがあるんだそうです。

お道で言うならば、絶対安心の心のおかげで頂く。それは母親と共にお互いが、子どもにしてみれば母親の胎内から生まれて、母親の胸の中でしばらく休むことによって、これから先々の心の安心のおかげを頂くんだそうです。

そういう風にして、母親と子どもの関わり合いという中で色んな働きがある。

話は変わりますが、中国のウイグル自治区にタクラマカン砂漠というのがあるんです。

その砂漠を横断する。途中ではキャンプをして、ラクダに乗って移動するわけですけども、その横断する途中で、あるラクダが出産をしました。ラクダも生まれたら立ち上がって、まずは母親の母乳を飲むんだそうです。ところが、ラクダはなかなか立ち上がらなかった。

現地の人が、「ラクダは三十分以内に立ち上がり切らなかつたら、もう育たない」と言う。見るに見かねて現地の人々が、生まれた赤ちゃんを、体温が下がらんようにというて毛布を出したり、

体を乾布摩擦してですね、温めたりしながら、そのラクダが立ち上がるのを待っておるんだそうです。心配する中、二十分も過ぎ、このラクダはもう死んでしまうんじゃないかというギリギリになつて、そのラクダの赤ちゃんが立ち上がったんだそうです。

立ち上がったら、ちょうど乳房の高さに子どもの高さがあるんだそうですね。これも不思議ですね。ちょうど立つて飲めるところに母親の母乳があるんだそうです。

誰が決めたわけでもない。まさに神様から頂く以外にない働き合い。時間が経ちましたらですね、体温が低下して死んでしまうと云われる。それが母親の母乳を飲むと共に体温が元の正常値に戻っていく。そういう働きが母乳の中にあるん

だそうです。

わあ、すごいなあと思いました。その母乳の力というもの。やはり、生かしてやまないお働きをその中に与えて下さった神様。ありがたいなあと思いましたね。

生まれたばかりの赤ちゃんにも、神様は生かしてやまない働きを与えて下さっています。神様のおかげは、世界にいっぱい満ちています。その中に生かされている私たち。何とありませんか。ありがたいことでしょうか。



《信心ライブ》第三回

「トマトの心」



金光教の集会で行われた発表や講話などを録音で紹介する「信心ライブ」。

今日は、福岡県香春教会の山下輝信さんが、平成二十六年十月二十二日に、金光教本部でお話されたものをお聞き頂きます。山下さんは、金光教本部のある岡山県金光町で、単身赴任されています。

私は、野菜と果物が大好物で、よく頂きます。その中でも、トマトが好物なんです。トマトというのは非常に便利がいいですね。野菜ですけど、野菜にもなり、果物にもなりますから、

もう本当に再々頂いております。

そこで、これは、庭にトマトがあるとええなと思っただけですね。ところがですね、宿舎は庭土ですから、畑はもちろんない。

ここを掘って、トマトが育つかと思ったんですけど、まあやってみようということで、固い土の上に一〜二センチ荒砂を引いてあるのを十センチぐらい掘り起こして、肥料をやりましてですね、トマトの苗を二本買って植えました。

「はあ、お土さんお世話になります。どうぞよろしく。お天道様ありがとうございます。どうぞよろしく。お湿りさんありがとうございます。どうぞよろしく」

毎日ですね、水をやる。「トマトさんありがとうございます。どうぞ元気でおかげをこうむって下さい」言

うてですね、本当に自分なりに愛情込めて接してまいりました。

家の前は、道ですね。そして、その向こうは、田んぼなんですね。こっちは、ずっと畑なんですね。

農家の関係者はたくさんおられる。ですから私がトマトを植えとるのは知つとる訳ですね。

最初のうちは恐らく、「なるもんか」と思つとつたんでしようけれども、それがなり出すんですね。ぼつぼつぼつ花が咲いて、実がなる訳ですけど、そうすると、行き交う方が、「あら、なつたらあ」というてびっくりする訳ですね。

そして、そのうち、次々とトマトがなる訳ですね。大きくなる。色付いてくる。隣の畑の方が、こつう言ふんですね。「まあ、お宅はようなりますね。うちは、こつうはならん」と。畑専門にずつとや

つておられる訳ですけども、「お宅のようには、うちは出来ない」と、こつういう訳ですね。

それから六月になりました、家内がお参りに来まして、そして、一泊して帰ったんですけども、その時にですね、庭の草むしりをしとつたんですね。トマトの周辺をですね。

家内が上がって参りまして、「隣の方がよう言いよつたけど、確かによう出来とるね」と言う。

「そりゃあ天地のお恵み、お働きを頂いてね、しつかりお礼申して作らせて頂いとるから、お世話させて頂いとるから、そら出来るさ」と言いました。そうしましたら家内がですね、「そりゃね、あなたがしつかりお礼申して、しつかり喜んで、しつかりありがとつう言つて頂いておるから、私は出来ると思つよ」と、こつう言つたんですね。

辛口の家内で、褒められたことはないですね。よく言われたこともありませんけれども、珍しく言いましたですね。

「あ、そこだな」と思ったですね。正しくこちらが喜んでトマトに接し、採る時も、「トマトさん、ありがとう」と言うて採らせて頂いて、頂く時も、「本当にトマトさん、ありがとう。親神様頂きます」と言うて頂く。そのハートが、やっぱりトマトに通じるんだろうと思うんですね。

「何？ トマトに心があるもんか。通じるもんか」と言うんですけど、信心があれば分かるんですね。やっぱりトマトにはトマトの心、人間には人間の心があるはずですね。この天地から私も人間は、命を頂いとる訳ですから。そして、天地の親神様からお心を頂いとる訳ですから。トマト

も全く等しく、トマトとしてこの天地から命を頂いとる訳ですから。

人間の心とは違いますけれども、トマトの心があるはずですね。「ありがたい、うれしい」という心でやっぱりお世話し、採らせて頂き、頂けばですね、必ず伝わると思うんですね。そういうふうにして頂くからこそ、頂いたトマトも喜ぶ。そのトマトの心が分かるというのが、やっぱり信心だと思っんですね。

四月末に植えましたですね、五月月ですよ。五月ずつと収穫が出来ているんですね。二本の苗ですよ。

このころでは、前を通る人が、今度は表現を変えました。最初は、「なつとらあ」。「ようなつとる」。「まだなつとる」と言うてですね、本当に冗

談抜きでそう言って通るんですよ。

ですから、「本当にありがとうございます」と言うて三つ探ればですね、また三つぽこぽこぽこ出てくるんですね。そりゃあこの時期ですよ。

もう根本は木のようになって、枯れかかってます。けれども、七、八十個なつとる訳ですね。

やっぱり喜び合うんですね。ありがとうございますの心が、トマトに通じてですね、そして、トマトがまた出来るんですね。

これはもう人間対人間もそうだと思いますし、人間と万物もそうだと思うんですね。「ありがとうございます」という心を伝えるから、向こうも「ああ」と思うんですね。そのものの心が、ここに何らかの形で生まれ現れてくるんじゃないかと思うんですね。

トマトの心、考えてもみませんでしたね。私

の知り合いで、会社を定年退職した方が、家庭菜園を始めました。今まで会社に勤めていた時は、雨が降ると憂鬱ゆううつでしたが、今では雨が降ると、畑の作物たちが、潤い、喜ぶ恵みの雨だと思え、雨降りもまたうれしくなる、とお話してくれました。山下さんがおっしゃるように、あらゆるものは「等しく心を頂いているもの」として、謙虚に「しっかりと喜んで、しっかりとありがとう」の心で接していったら、聞こえないと思っているものの声が聞こえてくるかも知れません。

いえ、それだけではありません。それらを生かそうとしている天地の声、神様の声も、聞こえてくるように思いました。

「おかげって何だろう?」

金光教の集会で行われた発表や講話などを録音で紹介する「信心ライブ」。今日お聞き頂くのは、平成二十六年四月、鳥取県根雨教会の教師、佐藤剛志さんが、ある教会で十八歳の時の体験を話されたものです。佐藤さんは高校生の時、両親と弟を相次いで亡くし、家族は二十歳のお兄さんと自分の二人だけになってしまいました。念願の大学には合格したのですが…。

ただどね、喜びもつかの間なんです。お金はない。どうしようと。もうここまできなあと、半ば諦めかけておったんですけども、その時に高校

の進路指導の先生が、ある奨学金の制度を教えてください。下さった。この奨学金が一番高く、しかももらえるものだと。だけど、一番審査が厳しく、採用も全国で一名。やってみるかと言われて、えーっと思いました。その審査にはですね、たった一つ、小論文を書くということが決まっておる。そのテーマとは、「将来の希望」というテーマだったんですね。

繰り返しますけども、私のその時の状況は、母、弟、そして父と、立て続けに亡くなって、とにかく悲しくて悲しくてしょうがなかった。今の状況に不満こそあれ、到底希望を持てる状態じゃないですね。そんな状況の中で「将来の希望」という小論文が手渡されたんです。どんなに頑張ってもこれは無理に決まってるなあと。締切が、しかも

一週間後。持って帰っても、一文字も書けん。そんな状態が三日過ぎたんですね。

そこで佐藤さんは、神様の前に座り込み、これまでのことを振り返りながら、心に浮かんだことをノートに書き留めていきました。

これもう原文のままです、その時の…。

弟は孔脳症という、生まれつき大脳の大半が欠乏した状態で生まれてきたこと。

医師からは、出産前に、「この子は生まれても一年持たない。また、重度の障害を抱える」と断言されたが、父と母は、「例え短い一生であろうとも、重い障害を抱えようとも、かわいい我が子に変わりはない。この子の生まれた意味を、神様

がこの子に持たせて下さった御用を、親として見つけていこう」と夫婦で誓い合ったということ。

目も見えぬ、耳も聞こえぬ、生涯寝たきりという重い障害を抱えた弟であったが、両親の一生懸命なご祈念の中、神様が十三歳まで保たせて下さった。弟の働きが徐々に現れてきて、私たち兄弟の心を優しくしてくれ、また育ててくれ、家族の心をいつしか豊かにしてくれたこと。

そして、弟がいたころ、常に流れていた穏やかで心地よい空気は、両親がどこまでも神様に真剣に向き合って、信心を生活に現す努力をしてくれたおかげであった。

体が不自由だったその弟を中心に、生き生きと生活していた楽しかった時のことがね、すごいその時に思い起こされたんですね、ご祈念中に。

それを一つひとつ書き留めていった。それが三日
続いて、締切の前日の夜、そのメモを基にして一
気に書き上げたんですね。

で、書き終えた時、何とも不思議な思いでした
ね。あれほど書けんと思っていただけものが今、目の
前に出来ておるんですね。これは神様が書かせて
下さった、いや、神様が書いて下さったんじゃない
かと、本当にそう感じたんですね。

で、何よりも意外だったのが、その、書く前
は将来に対して、希望というものがほとんど持て
ない自分であったのに、書き終えるころには、不
思議と将来に希望を持ち始めている自分がそこ
にあったんですね。なぜそういうふうに見えるよ
うになったかというところ、両親の神様への向かい方、
つまりは親がしてくれた信心というものを、その

姿を再確認出来たということが大きかったん
ですね。

さてどうなったかですね、結果が。

見事採用となりました。ほぼ大学生活全部を
賄ってくれるものでした。おかげです、たく
さんの方々のお祈りの中で、本当に実り多き学
生生活を送らせて頂いた。

皆さん、おかげって何でしょうかね。財が全く
無いところから、奇跡的な財のおかげを頂いたこ
と、またそれで大学に行けることになったとい
うこともおかげですね。でも、単純にそう思えん
ですね。お願いしておかげに到達するその道中
です、もっといいおかげがあったからなんです
ね。何かというと、神様のお働きに触れるとい
うことが出来た。そして私という人間をちゃんと見

て下さっている、私のことを本当に大切に思っ
て下さっておる神様に出会えたということが、一番
のおかげだったですね。

神様のお心に触れることが出来て、そして先の
安心を頂いたということが、もうこれが一番のお
かけです。

家族を次々に失った悲しみと不安の中にあっ
ても、心を静めて神様と向き合った時、見えて
きたのは、自分がこれまで、どれほどに、両親
の深い愛情の中で育てられてきたか。そして今
も、神様からどれほど可愛がって頂いている自
分であるか、ということだったんですね。

人間に生まれた限りは、寿命の長い短いがあ
り、避けることの出来ない病気もあるのでしょ

う。しかし、三人の子どもたちを、神様からの
授かりものとして、いのちの限り愛おしんでき
たご両親の信心は、今なお剛志さんの中に生き
続けています。

信心というものは、「死んだらおしまい」と
いうものではないんですね。生き死にを超え、
世代を超えて働き続け、子孫にも幸福をもたら
していくものなんだということを、このお話は
教えてくれます。



金光教本部 ラジオ放送係

住所 〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷320

電話 0865-42-6453

FAX 0865-42-2114

メール w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

ニッポン放送	日曜日	あさ4時30分
東海ラジオ放送	金曜日	あさ5時25分
朝日放送	水曜日	あさ4時50分
RKB毎日放送	日曜日	あさ6時50分

ここで聴くおはなし

検索

